

WHO WAS HENRY VIII

2009年11月12日

1 単語

単語		
行	単語	意味
1	date from ~	(熟) ~にさかのぼる, ~にはじまる
	portrait	(名) 肖像, 写真
5	swear to ~	(動) ~を断言する, 真実だという
	illegitimacy	(名) 違法, 不合理, 非嫡出 ((形)illegitimate;(子供が) 嫡出でない)
6	Duke	(名) 公爵
8	heir	(名) 相続人, 継承者, 跡取り (-less はないという意味だから, heirless は継承者がいないということ, たぶん)
9	defiant	(形) 挑戦的な, 反抗的な
11	doctrinal	(形) 教義上の, 学説上の
14	uprising	(名) 反乱, 暴動
	peacetime	(形) 平時の
15	rebellion	(名) 反乱, 謀反 (不成功に終わった)
	monarch	(名) 専制君主, 皇帝
17	pope	(名) ローマ教皇, 教祖
19	overthrow	(動) ~を転覆させる, ~を倒す, 廃止する
	throne	(名) 王座, 王位
22	reassert	(動) ~を再び断言する
	rage	(動) 激怒する, 暴れる, 叱り飛ばす
23	tumultuous	(形) 騒がしい, 騒々しい, 動揺した
27	inscrutable	(形) 計り知れない, 不可解な

行番号をつけたら表の左にある行の欄が利用できます。*1

*1 行番号は,p20 の最初の行を 1 として, ページ内にある太文字は除いたものです。

2 p19 までのあらすじ、というか今回担当短いので、全部のまとめ

ほんと、遅くなってごめんなさい。本文の通読の前に、まとめを読んで、英文の理解を促すっていうのが、本来の目的らしいんですけど、もうみんな英文読んだのかな？読んだなら、あんまり意味ないのかもしれないけど、例によって、今回もまとめてみます。

ヘンリー 8 世 (以下、ヘンリーとします。) というのは、有名な事実としては、もともとはカトリックの熱狂的な信者だったんですけど、自らの離婚問題が原因で、イギリス国教会というのを作ったということです。(本文では、あまり触れられてませんが)

本文を本当に大雑把にまとめると、ヘンリーは、世間の人が思っているような単なるプレイボーイ的な人じゃないんだよってということだと思います。まず、冒頭の 2-3 ページにわたって、世間の人へのヘンリーに対するイメージとそれがいかに間違っただのかについて述べられています。(1 ページ目からでかかど写真が描かれていますが、これはホルバインさん^{*2}が書いたものだそうです。) 彼に対する世間の人々のイメージをまとめてみると、

1. 太っていること
2. 多妻であること (6-8 人ぐらいと書かれています)
3. 多くの人々を殺しているということ

こうしたイメージは、なぜ生じたのでしょうか？それが、本文の中で述べられていきます。原因の一つ目は映画です。こうした半分本当で、半分嘘のような話は映画製作者のゆがんだ映像によるものだとしています。最近の学問研究では、映画の中で、ヘンリーは、1930 年代、1960 年代、2000 年代でかなり異なって描かれているそうです。理由は、こうした映画は、各時代における文化的なものに縛られるからだそうです。時代ごとに、描かれているヘンリーについてまとめてみます。

1930 年代・・・未熟、性的なこと (想像にまかせます) に消極的、妻の策謀にかかるかわいそうな人

1960 年代・・・美しい容姿、上品

2000 年代・・・ゴッドファーザー^{*3}的な、感性と攻撃性を併せ持つ、プレイボーイ

映画によるイメージのせいで、誤ったヘンリー像ができていることが、世間の人へのヘンリーに対する理解を妨げている一つ目の原因。

次は、二つ目の原因が述べられていきます。それは、従来の研究が、ヘンリーそのもの (人格、心情など) を研究してきたのではなく、その周辺情報 (夫婦関係、宮廷? (court ってるので)、行動、子供など) の研究にとどまっていたということだそうです。

最後にして最大の原因が述べられています。それは、ヘンリー 8 世の人格が生涯を通して変わっていないと考えているところです。つまり、世間の人々が、ヘンリーに持つイメージは、晩年のヘンリーであって、若い時などは異なるということです。

次の段落では (p16 の右のコラム)、本文は、どうやって、ヘンリーを深く知ることができるか? が書かれています。まとめると、

1. ヘンリーの行動・発言について、現在報告書がある
2. ヘンリーの書いた手紙や、論文がある

^{*2} ドイツ・ルネサンス期のアウトグスブルクの画家で、1536 年以降ロンドンでヘンリー 8 世の宮廷画家をしていたそうです。

^{*3} マフィアなどの最高実力者。ボス

こういった証拠を使えば、ヘンリーの人格について判断できようとして書いてあります。

さあ、ここから、ヘンリーについての分析が始まっていきます。ヘンリーは若いころと年をとってからで、ものすごい差があるということが分かったそうです。(いろいろな意味で)

ヘンリーは、1509年に熱狂的な歓声とともに即位しました(当時18歳)。ヘンリーは、比類のない、外見、適性、技能を持ち合わせており、賢く、鋭い感性があったそうです。フランス語もスペイン語もラテン語も話し、音楽家、作曲家としての才能にもあふれていたそうです。また、ダンスとかアーチェリーとか流鏑馬？(馬上槍試合・・・what?)のような、スポーツにも秀でていたそうです。こうしたスポーツに対する精力的な態度が、ヘンリーの人格、若いころの元気の本質だったそうです。若いころのヘンリーは、活発で、生き生きして、陽気で、勇ましかったそうです。(持っている衣装も、きらびやかな装飾品も・・・ですね。)

いろいろ書かれていますが、まとめると、若いころのヘンリーは才にあふれ、思いやりもある素晴らしい人物だったということです。

年をとってからのヘンリーですね。まず、体型の変化。一気に太ったみたいです。太っただけならまだしも、怒りっぽく、気まぐれな人物になってしまったみたいです(ほかに、金にどん欲、人への信頼の低下など)。怒りっぽくなった原因の一つには、異常に膨らんだ足の腫瘍らしいです。これが、1536年に事故で、傷が開いて、常時痛いし、菌が入って、熱は出るし、ひどい悪臭はするようになるし・・・。

さらに、人への信頼の低下が、自分に逆らう人間たちを次々に殺していくことにつながり、彼を残酷な王様にしてしまったのです。

では、どのように、いつ、なぜこうした変化が起こったのでしょうか？その疑問に答える形で本文が展開されていきます。

1. ヘンリーは、中年になって生殖機能の危機？に至ったうえ、若いころのような全能へのあこがれに沿えなくなった

2. 頭のけがが原因では・・・

などいろいろ言われていますが、ここから筆者の見解が現れます。筆者は、1536年にヘンリーに変化をもたらすあらゆる要素が存在しているのではないかと断言しています。45歳になったヘンリーは、脅し、裏切り、反逆、失望、けが、悲しみ、不安に苦しみました。まず、馬から落っこちて、乗馬できなくなります。身体的な活動が、ヘンリーの自己と強く結びついてきたため、これは大きなダメージです。また、このけがが、肥満につながります。さらに、ヘンリーの奥さんが最初の妻のお葬式と同じ日に、男の子を流産してしまいます。議会からは、ヘンリーに対する反逆を示す法案が通過します。ときを同じくして、ヘンリーのいとこが、イギリス国教会の長としてのヘンリーの立場を非難しました。さっき流産のところで、でてきたヘンリーの奥さんが、ヘンリーの部下？に強姦されます。反抗的な宗教革新も目の当たりにし、自らに対する暴動も経験しました。

こうした一連の出来事が、自分の権力を使って、敵に対して徹底的に攻撃する、暴君ヘンリーを生み出したのでした。

こんなところでしょうか？急いで作ったので、かなりミスがあるかもしれないですけど、まあ適当に役立ててやって下さい。by まつ